

大学院生が企画運営する哲学カフェの社会教育学的実践 ～地域コミュニティでの対話の場作り～

The Social Pedagogical Practice of a Philosophy Cafe Conducted by Graduate Students:
Creating a Place for Dialogue in a Local Community

稲原美苗・藤原雪・山川哲（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）⁽¹⁾

はじめに

筆者たちは2018年2月から神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」（以下「あーち」と表記する）の一室を使って、異世代間交流の場としての「哲学対話」実践を続けてきた。⁽²⁾「てつがくカフェ～ジェンダー・コミュニティを考える～」というテーマを掲げて、13回の「てつがくカフェ」を開催した（2020年3月31日現在）。ここではあらゆる社会問題を自分たちの問題として捉え、皆で対話をする「場作り」を試みてきた。「あーち」は、子育て支援を基軸とした社会教育学的な実践研究の拠点として2005年に設立された。利用者の約8割は乳幼児とその保護者だが、「共生のまちづくり」を目指した施設であることから、障害者とその家族や支援者、児童や学生、高齢者などが集えるようなプログラムも多く企画されている。2016年後半から、多様なニーズのある子どもたちのために地域内で居場所を作るプロジェクトとして学習支援や子ども食堂を運営している。筆者たちは、そのような施設において「哲学対話」の実践をしてきた。最初のうちは、一般的な哲学カフェのスタイルを使って、対話を行ってみた。しかし、「あーち」の利用者（乳幼児連れの保護者）が参加できず、中高年男性（「哲学カフェの常連」と呼ばれる人々）が参加者の過半数以上を占めることが多かった。⁽³⁾初回から7回目までは、長年神戸で多くの哲学カフェを主宰してきた方に教わりながら、その方と教員が企画をし、ゼミ生（主に大学院生）は運営や進行を手伝っていた。しかし、大学教育プログラムの一環として「てつがくカフェ」を位置づける必要性やゼミ生の要望などがあり、8回目からは、ゼミ生が主体的に企画運営する哲学対話実践へとスタイルが変容していった。

筆者たちが所属している講座は社会教育を基軸にし、成人の学びの多様性について実践研究をしている。特に当該研究室では、哲学対話の実践を「変容型学習」として捉え、その社会教育学的意義について考えてきた。⁽⁴⁾「あーち」の「てつがくカフェ」では、対話を契機として、人と人をつなぎつけ、それまで自明だと思い込んでいたことを問い続けられるような「場作り」を、参加者の方々、院生・学生たちと協働し、「安心して語れる場（コミュニティ）」の創成を目指してきた。ここでは、筆者たちの実践の変容と企画運営側の葛藤、社会教育との関連性について報告したい。

1 「のびやかスペースあーち」での「てつがくカフェ」の変容

1～7回目の「てつがくカフェ」を開催したところ、中高年男性が参加者の過半数を占めることが多かった。それらの参加者の多くは、一般の哲学カフェの常連の方々だった。つまり、彼らは定年退職者層であり、家事・子育て・介護に携わってこなかった男性だった。そのような場では、若年層の人たち（学生）は学校や会社などの年功序列を意識してしまい、語り出すのを躊躇していた。さらに、会場での座る位置にもある傾向が見られ、中高年男性が中央部に、女性や若年層はその周辺に席を取っていた。つまり、会場そのものがジェンダー化されていたように感じた。また、男性参加者が少ない場合でも、男性の発言回数が増え、発言時間も長いといったジェンダー・バイアスが見られた。中でも、7回目の「生産性」をテーマにした際のこと強く印象に残っている。参加者の約7割が中高年男性だった。時事問題を取り上げようとしてこのテーマを設定したのだが、某衆議院議員の「LGBTは生産性がない」発言に影響を受けて、彼女の支援者が参加していたのだ。その発言の擁護派と懐疑派に分かれてしまったため、その場が対話から議論へと急変してしまった。

筆者たちが「てつがくカフェ」を開催してから気付いたことの一つに、参加者たちは異世代間・異性間交流が苦手だということが挙げられる。さらに、テーマについての関心の持ち方に対して男女差があることも対話の内容から浮き彫りになってきた。例えば、女性は身近な問題や具体的な状況から考えようとするのに対して、男性は社会的・政治的な問題や社会的規範を前提に語り出す傾向が強いように感じた。

前述したように、8回目から院生たちが主体となり「あーち」の利用者目線で場作りを試みるようになった。「家族」をテーマにした8回目の「てつがくカフェ」では、母親たちを対象にしたピア対話を開催した。あーちの利用者の多くが過ごしている部屋に移動し、卓袱台を囲む形で対話をした。小さな輪になったからかもしれないが、参加者から家族に関する多くの疑問が出されて、活発な対話が促された。(11回目の「ワンオペ」の際も8回目と同じように開催した。)しかし、8回目は異世代間交流の場にはならず、乳幼児の母親という括りで集まってきた参加者が安心して語り合ったというピアの場になった。9回目以降、乳幼児連れの母親や父親も参加できるように、会場を元の部屋に場所を戻して、そこにプレイマットをフロアに敷き詰め、乳幼児を囲みながら対話をした。10回目は、テーマを「イメージと感覚」に設定し、これまでにない企画に挑戦した。それは、ピアニストにあるクラシックの曲を演奏してもらい、参加者に題名や曲の説明をせず、その曲の印象について伺った。その後、題名と解説を明かしてから、参加者に再度同じ曲を鑑賞してもらった。しかし、曲に題名や説明が付くと、その枠に合わせて曲を聞き、イメージも固定化されることに気付いた。10回目は新参加者が増えたが、常連だった中高年男性の姿が見られなかった。

回数	開催日	テーマ	参加人数（学生 staff）
1	2018年 2月 3日	「イクメン」という呼び名は必要？	12 (1)
2	2018年 3月 10日	女子	14 (2)

3	2018年 4月 14日	老老介護	11 (2)
4	2018年 6月 9日	付き合う	10 (1)
5	2018年 10月 13日	家族	12 (1)
6	2019年 1月 12日	義家族	10 (1)
7	2019年 2月 9日	生産性	9 (1)
8	2019年 4月 13日	家族 (あーちの利用者限定)	8 (1)
9	2019年 5月 18日	男らしさ・女らしさ	19 (2)
10	2019年 6月 15日	感覚とイメージ	28 (4)
11	2019年 8月 29日	ワンオペ (あーちの利用者限定)	8 (1)
12	2019年 9月 21日	絵本 de てつがくカフェ ヨシタケシンスケ著『りんごかもしれない』	14 (2)
13	2019年 11月 16日	皆が参加しやすい場とは？	6 (2)

表①：「のびやかスペースあーち」での「てつがくカフェ」の開催記録 (乳幼児も含む)

筆者たちは試行錯誤しながら、「てつがくカフェ」の企画運営をしてきたが、中高年男性層が増えると、あーちの利用者である乳幼児連れの母親たちが参加できず、逆に母親が増えると、中高年男性の参加者数が激減してしまう。それには何か構造的な理由があるのではないかと考えた。それは、それぞれの立場によって「てつがくカフェ」の場に求める内容が「議論」と「対話」に区別できるからである。長年に亘り哲学対話やP4Cなどの活動が続けてきた高橋綾 (2017) が「議論」と「対話」の違いをまとめた表を使ってこのような現象を考察すると、中高年男性層が求めているのは「議論」であるのに対して、母親層や学生・院生たちが求めているのは「対話」であると考えられる (表②を参照)。つまり、1～7回目は、議論的要素がより多く含まれており、8～13回目は、対話的要素がより多く含まれていたのではないだろうか。

	議論	対話
参加者の位置づけ	個人主義的 理性的存在	身体や感情を持った、 ヴァルネラブルな存在、関係的存在
参加のモード	客観的、分析的、敵対的	共感 - 共同的、受容 - 肯定的
目的	真理の探究、問題解決、 合意／対象知	相互理解 意味の共有／自己知
影響	なし	変容、成長

表②：高橋綾 (2017) 「哲学対話とスピリチュアルケア」 Co*Design.1 P.34⁽⁵⁾

2 企画運営 (進行) をする大学院生・教員の葛藤

2.1. 山川哲 (大学院生) の場合

「てつがくカフェ」という一期一会的な人々の集まりの中で、どのようにしてあるテー

マについて対話できる関係性を作れるのかという課題について悩み続けた。「共に考える」ということの困難さがあるように思う。それ故に、テーマを決めることに深く考え過ぎてしまい、「共に考える」ための仕掛けを作ることに苦勞している。筆者は、「皆が参加できる場作り」という社会教育学的な目標を掲げて、対話の場作りを考えてきたが、対話における縦の深さではなく、横の広がりによって価値を持たせた場の形がどのようなものなのか、進行役のあり方について悩み続けた。例えば、対話の中で沈黙している人を見かけるが、それはその人が参加していないということではないと分かっている。だが、沈黙している人に向き合う形として新たな形を模索したくなった。特に、筆者がメインになり企画した10回目の「てつがくカフェ」では、私たちが普段当たり前のように使っている言語を疑問視してもらえそうな仕掛けを考えたのだが、参加者のフィードバックの中に「哲学対話ではなく、ワークショップのようだ」との指摘もあった。しかし逆に、「論理の赴くところから従ってではなく人への好奇心の赴くところから従って対話が進んでいく」という感想を頂いた（Philosophy 愛知の facebook のページより抜粋）。社会教育学を学んできた筆者は、対話を進行していく上で、一つのテーマを深めていくことも重要だと認識しているが、それ以上にその場にいる全ての参加者が安心して対話できる環境を共に作り出すことの重要性に気付いた。

2.2. 藤原雪（大学院生）の場合

テーマを決める時に、どのような話題を取り上げるのか迷うことが多かった。筆者は、参加者のアンケートに書かれている回答や社会的に話題となっていることとの擦り合わせを行い、広すぎるテーマからどのような点を参加者と一緒に考えたいのか、焦点化していく難しさを感じた。進行役を務めた時は、テーマを狭く捉え過ぎないように、参加者の語りを誘導しないように気遣った。特に、多様なニーズのある人々が参加しやすい対話の場とはどのようなものなのか、常に自問自答し続けている。そこには必ず相反する点が出てきた。例えば、座席の配置、座るスタイル（椅子かマットか、また両方用いる場合は配置をどうするのか）、「てつがくカフェ」に参加しやすいように入出口を開けておくのか、集中して話しやすくするためには閉めるのか、など、多くの壁があった。そもそも進行役の役割を把握するのが難しかった。進行役は対話のリーダーではなく、参加者とも異なるため、どこまで対話に介入・参入して良いのかが分からなかった。中立的な立ち位置で語りの交通整理をするのも難しかった。「てつがくカフェ」を運営したことによって、世代間、男女の間に権威性が生じることに気付いた。筆者は大学院生かつ女性であり、社会的な立場が弱いことから、その場で進行役を務めることが困難な場合があった。

2.3. 教員（稲原美苗）の葛藤

社会教育学のコースで学んでいる院生・学生にとって、「てつがくカフェ」を企画運営することは、「インクルージョン」、「場作り」、「エンパワメント」を実践的に考える学びに繋がっていると実感した。その中で、筆者自身がゼミ生から学ぶことが多かった。「哲学対話とは何か」という問いは常に考えてきたが、それよりも大学の社会教育施設を利用するため、「対話の場作り」プロジェクトというところに意識的に焦点を当てて取り組んできた。特に、8回目からの「てつがくカフェ」は、企画運営側も参加者側も協働して「対話

の場」を作っていく過程の中に学びがあると考えて実践してきた。そのような経緯から一般的な哲学カフェとはその形態が異なっていた。「てつがくカフェ」の表記を平仮名で「てつがく」としたのも理由がある。通常の哲学カフェと区別するためにあえて平仮名にしたのだ。熟練した進行役がいない哲学対話ということで、物足りなさを感じた参加者も少なくなっただろう。しかし、個人や地域が抱える課題に対して「当事者意識」を持ち、能動的に行動できる「市民」になるために、まず、このような「対話の場」のように、異世代間、異性間、異文化間で交流し、他人の言葉を聞き、自分の言葉で考えることから始める必要がある。葛藤は、やはりどのように企画運営すれば、より多くの方々を巻き込んでいけるのかということになるだろう。筆者自身は子どもを育てた経験がなく、それまで静かに落ち着いた場所での対話を好んできた。だが、ゼミ生の一人が母親になったことで、その価値観は大きく変えられた。乳幼児と一緒に母親が対話に加わるほうが良い2つの理由について哲学対話の実践研究を続けてきた梶谷真司(2018:194-5)は次のように述べている。

- ① 母親という哲学的資源を持った人が参加すると、母親としての立場からテーマを考え、異なった世界観を語ってくれるから。
- ② 対話を哲学的にしてくれる人を排除しないほうが、問いも沢山出てくる。子どもがいる場で安心して対話をする事。(6)

つまり、筆者が母親になった院生と関わる以前に考えていた哲学対話では、母親や父親としての立場からテーマを考える参加者を排除してきたのかもしれない。あらゆる経験を哲学的資源として捉えることによって、異なる世界観が語られることは、あーちの「てつがくカフェ」の実践でも明らかになった。筆者の葛藤はこれからも続く。

3 哲学対話を社会教育の中で使えないのか？

3.1. 社会教育とは

社会教育とは、都道府県や市町村などの自治体や公的機関、博物館、図書館、あるいは大学などが公的に誰でも参加できるように工夫し、提供される学習の機会のことだと定義される(教育基本法第7条を参照)。一般的に、公民館、カルチャーセンターなどで開催される文化、教養講座、市民大学講座などを示す。筆者たちは「哲学対話」を社会教育実践の一つだと位置づける。そのルーツを探ってみたところ、社会教育の起源として考えられているのが、ドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマス(1994 [1962])は『公共性の構造転換』の中で示唆したように、近代化のプロセスにおいて公共性という概念を生んだ「サロン(フランス)」や「コーヒーハウス(イギリス)」などのような文化的な装置だろう。(7)西欧の絶対王政末期(18世紀後半)に台頭してきたブルジョア層市民が街のサロンやコーヒーハウスに集い、新聞・雑誌などを通じて情報を得て、文化・社会・政治的な話題について対話や議論を行い、コミュニティ内での合意形成してきたことが、社会教育へと展開してきたとされる。現在、国内外で展開を見せている哲学対話も、ある場所に市民が集い、

様々なテーマについて対話を行う活動を示すのであれば、社会教育学的な実践として捉えることができるだろう。

3.2. 社会教育学的実践としての対話

進展する社会に適応するために生活や社会の課題を見つけ、一人一人が主体としてコミュニティ活動に参加できるように自己変容を促す働きが哲学対話にはある。「てつがくカフェ」を企画運営してきた筆者たちは次の3つの気付きを得た。長年「臨床哲学」の活動を続けている中岡成文（2012: 12-3）が「自己変容のきっかけ」についてまとめたように：

- ① それまで想像もしなかったものの考え方を紹介される。
- ② それまで疑いもしなかった発想の根底を壊される。
- ③ 前から変だと思っていた現場の慣行がやはり倫理的に、あるいは社会全体から見て間違えであることが分かる。⁽⁸⁾

企画運営側として、「皆が参加できる対話の場作り」を真剣に考えれば考えるほど壁にぶつかった。具体的には、それまで考えていなかった課題が出てきた。①乳幼児や児童と共に語れる場とは ②あらゆる当事者が集まる場で、一人一人の脆弱性をどのようにケアするのか ③ここで言う「皆」とは誰のことなのか。「皆」と一括りにしているが、「粹」があり、そこから排除される人がいるのではないか。

「哲学対話」は、「私たちは無知である」というソクラテスの教えから出発して、「もっと自分や他人のことを知ろう」ということを意識化することを促す力を持っている。このような「哲学対話」の精神が、知識を詰め込むだけの従来型（パウロ・フレイレの用語では「銀行型」）の教育に代わって、深く対話し創造的に思考する学びを高める教育実践として世界的に注目されている。⁽⁹⁾ 社会教育実践としての「哲学対話」とは、あるテーマについて他者と共に考えることによって、それまでの先入見を崩して、新しいものの見方を獲得するような「学び合う場」であると言えよう。筆者たちが「てつがくカフェ」を企画運営する中で、多くの気付きがあった。そこに集う参加者たちの学びは、企画運営者／参加者という対立構造を超えて、単純に年齢によって決まるわけではなく、むしろ、どのような経験を積み重ねてきたか、あるいはどのような集団や組織に所属している（いた）か、といった社会・文化的な前提や要因によって大きく異なる。葛藤しながら自分自身の考え方や認識が変容していく。「哲学対話」は、社会教育学的な考え方である「変容的学習」の一例だと位置づけることができよう。

【註】

- (1) 山川哲と藤原雪は2020年3月に神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程を修了した。
- (2) ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下HCセンターと表記）は、これまで神戸大学大学院人間発達環境学研究科で積み重ねてきた研究成果と地域などですでに展開されている実践との間につながりを強化していこうという理念で設立された。HCセンターは、コミュニティ支援に関わる活動をしている団体、NPO、NGO、企業、行政、学校などと連携しな

がら、研究や実践を進め、誰にでも暮らしやすいコミュニティの創成を目指している。

- (3) HC センターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」は神戸市立灘区民ホールの3階にあり、多くの市民に利用されている。この施設は、「子育て支援をきっかけにした共生のまちづくり」を目指す研究実践をすることを目的にし、2005年9月に設立された。
(<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-concept.html> を参照)
- (4) 「変容的学習」それまでの先入見を崩して、新しいものの見方を獲得するような学びである。世界観や人生観が変わるような人生の中で大きな転換になるような学びを含む。(ジャック・メジロー (2012 [1991]) 『おとなの学びと変容—変容的学習とは何か』金澤陸・三輪建二訳、鳳書房を参照。)
- (5) 高橋綾 (2017) 「哲学対話とスピリチュアルケア」、*Co*Design.1*、pp.25-44.
- (6) 梶谷真司 (2018) 『考えるとはどういうことか—0歳から100歳までの哲学入門—』、幻冬舎新書.
- (7) ユルゲン・ハーバーマス (1994 [1962]) 『公共性の構造転換』第2版、未来社.
- (8) 中岡成文 (2012) 『試練と成熟—自己変容の哲学—』、大阪大学出版会.
- (9) 河野哲也 (2019) 『人は語り続けるとき、考えていない—対話と思考の哲学—』、岩波書店.

本報告 2019年度採択科研費基盤研究(B)「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察 (19H01185)」(研究代表者：稲原美苗)による成果の一部である。